

## 地方小都市における盛り場の変遷過程 ——栃木県足尾町を事例として——

Decline of amusement quarters in a local mining town: a case study of Ashio, Tochigi prefecture

地理環境学コース 前島 裕美 Hiromi MAESHIMA

近年の地理学においては、盛り場の研究が増加しつつある。しかし、従来の研究の手法には問題点が二点ほどある。第一の問題点は、盛り場で生活する人々の視点が導入されていないこと、そして第二の問題点は、地方小都市が研究対象地域から除外されてきたことである。本研究の目的は、以上の問題点を加味した上で一鉱山町における盛り場の復原を行ない、従来の盛り場研究が盛り場という場所を孤立・独立したものと扱ってきた姿勢を批判・検証することである。

本研究の対象地域は、栃木県足尾町とその三カ所の盛り場である。足尾町は足尾銅山の発展により繁栄した町であるが、昭和48（1973）年の閉山を機に衰退が激しい。閉山前は足尾銅山における三カ所の主要な坑口（小滝坑・本山坑・通洞坑）に付随して、盛り場（南部・北部・中央部）が形成されていた。本研究では各盛り場の形成から終焉までの変遷を復原し、更にその結果と周辺地域との関係を比較した。

各盛り場を復原した結果、三カ所とも明治時代中期に開かれた坑口の周辺に形成されたという経緯を持つにも関わらず、その後の変遷に違いが見られることが分かった。南部・北部の盛り場は昭和初期前後から衰退し始め、戦後間もなく盛り場は消滅する。それに対して中央部の盛り場は昭和初期前後に規模が拡大し、戦後も閉山まで栄え続けた。

これらの違いには、各坑口およびその周辺地域の情勢、そして各地区の町における中心性の強弱が関係している。つまり、一つは元々中央部に公官庁等が集中するなど、中央部の中心性が他二地区に比べて大きく勝っていたことである。そしてもう一つは、中央部の通洞坑は南部の小滝坑・北部の本山坑と異なり、銅山の経営合理化によるマ

イナスの影響をほとんど受けていなかったということである。小滝地区の合理化に伴う縮小は既に明治末期から始まっており、昭和29（1954）年には閉山を待たずに坑口自体も閉鎖されている。本山地区も明治末期に労働争議による暴動事件・そして銅山の合理化の影響を受け、銅山の中心的地位を失った。逆に通洞地区は他二地区の合理化により銅山の中核機関が集中し、その状態が閉山まで続いた。これは、盛り場の変遷と周辺地域の変化が連動している例証となる。

更に、足尾町と茨城県潮来市の盛り場の違いを比較した。両者では盛り場の母体となる町の性格が異なり、足尾は鉱山町であり潮来は港町・観光地である。盛り場の相違点は二点あり、一点目は盛り場内部の構成の違いである。潮来の盛り場には一般商店や公官庁等の混在がほとんど見られなかったのに対し、足尾では混在が見られた。それは町の形成過程と歴史に関係する。足尾は銅山によって急激に発展を遂げたため都市が無秩序に形成され、盛り場に様々な都市機能の混在が見られたのである。

そして二点目は、盛り場に影響を及ぼした地域の範囲の差であり、潮来の盛り場のほうが、足尾よりも広範囲にわたっていた。具体的には足尾の盛り場は隣接する坑口周辺など狭い範囲の影響を強く受けていたのに対し、潮来では周辺市町村などのより広い地域の影響を受けていた。それは盛り場が形成された町の性格の相違に依るものである。

これらの結果から更に盛り場と地域との強固な関連性を証明することができ、従来のように盛り場は独立・孤立して扱われるべきではないという結論に至った。